

諏訪小だより

令和3年6月30日
7月号
多摩市立諏訪小学校
校長 齋藤 幸之介

人権研修会で学んだこと

先週は、お忙しい中学校公開にお越しいただき、誠にありがとうございました。授業会場を限定し、また時間数もとても少ない公開となりましたが、現在の状況を鑑みつつ工夫をいたしました。皆様から頂戴した御意見を生かしつつ、今後の公開では少しでも多くの場面を御参観いただけるように努力いたします。今はただ新型コロナウイルスの感染が収束に向かうことを願うばかりです。

さて、先日、私は東京都教育委員会主催の人権研修会をオンラインで視聴いたしました。これは、管理職が毎年受ける研修であり、新規採用教員を始めとして多くの教職員も人権研修を受講します。また、管理職は研修の成果を自校の職員に伝達し、指導の一環とします。

今年度の研修会では、出口真紀子先生(上智大学)の御講演がありました。出口先生は、マジョリティ、つまり多数派の立場から差別を考える、というお話をされました。

「特権」に気付くこと—様々な立場に立つために

出口先生は、マジョリティ側の人間は、多数派であるが故にもっている権利「特権」を自覚していない場合があります、よってマイノリティ、つまり少数派の人々の立場を考えづらい、とおっしゃっています。

出口先生は、私共教員に厳しいことも指摘されました。多くの教員は、例えば「日の当たる場所を歩いてきた」「自分の学校生活は楽しかった」そして「学校生活は「こうあるべき」と思っていることが多い」と捉えている、ということです。一方で、マイノリティ側にいる人々は、差別をされたときにこれに対処するために大変であり、またこのことについて語ることは大きなリスクがある、ともおっしゃっています。

これを解決するために、出口先生は「特権に気付いたマジョリティ側の人たち」がこのことに気付いてマイノリティ側について知ろうとすることが大切であり、そして行動を起こすこと、とお話をされました。改めて、私は、自身に無自覚であってはならず、どれだけ子供たちの立場に立てるかを考えなければならない、と強く思いました。

「何のために学ぶのか」

さて、この御講演の中で、出口先生は、平成31年度東京大学の入学式の祝辞に触れられました。上野千鶴子先生の祝辞は当時かなり話題になりました。「あなたたちは激烈な競争を勝ち抜いてこの場に来ることができました」から始まる言葉は、東京大学に入学できたのは、一人一人の努力だけではなく、「環境のおかげ」、つまり「あなたたちを励まし、背を押し、手を持ってひきあげ、やりとげたことを評価してほめてくれたからこそ」に続きます。

このことに異議を唱えた新入生も少なからずいた、とのことでした。しかし、出口先生は、それでも上野先生の御言葉を高く評価されていました。そして出口先生は、上野先生の以下の言葉に触れていらっしゃいました。「あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください」。

何に困っているのか、何に苦しんでいるのか、それがなかなか分からないことがあります。だからこそ、私共は、子供たち一人一人が異なる立場にあることを認めながら学び続ける大切さに気付くことができました。私はこのことを本校教職員に伝え、「全ての人が幸せになる権利」を大切にす学校に向かっていこう、と改めて決意をした次第です。